



Making and Revising Predictive Inferences in Japanese EFL Learners' Reading Comprehension

著者	名畑目 真吾
発行年	2015
その他のタイトル	日本人英語学習者の読解における予期的推論の生成と修正
学位授与大学	筑波大学 (University of Tsukuba)
学位授与年度	2014
報告番号	12102甲第7205号
URL	http://hdl.handle.net/2241/00125779

氏 名（本籍）		名畑目 真吾			
学 位 の 種 類		博士（言語学）			
学 位 記 番 号		博 甲 第 7205 号			
学位授与年月日		平成 27 年 3 月 25 日			
学位授与の要件		学位規則第4条第1項該当			
審 査 研 究 科		人文社会科学研究科			
学 位 論 文 題 目		Making and Revising Predictive Inferences in Japanese EFL Learners' Reading Comprehension（日本人英語学習者の読解における予期的推論の生成と修正）			
主 査		筑波大学 教授		博士（言語学）	卯城 祐司
副 査		筑波大学 教授			磐崎 弘貞
副 査		筑波大学 教授		Ed.D. (教育学)	平井 明代
副 査		関西学院大学大学院 言語コミュニケーション文化研究科 教授			
		博士（応用言語学） 門田 修平			

論 文 の 要 旨

本論文は、日本人英語学習者の読解において、後続文脈の内容を予測する推論（予期的推論）がどのように生成・修正されるのかを 2 つの実証研究に基づいて検証したものである。

研究 1 では、日本人英語学習者の読解における予期的推論生成と複数の要因の関連を検証した。まず実験 1 では、予期的推論生成と 2 つのテキスト特徴の関連を検証した。本実験では、先行研究から予期的推論生成への影響が示唆されている、「推論内容が登場人物の行動動機と関連しているか」、「文脈によってどの程度推論内容が限定されているか」を主要なテキスト要因とした。これらの要因を操作した短い物語文を使用し、推論内容を表す単語に対する再認時間、及び読解後に行われた筆記再生課題における推論情報の産出率の結果から、英語学習者の読解においては推論内容が登場人物の行動動機に関わり、かつ文脈によって強く収束されている場合に予期的推論が最も生成されやすくなることが示された。

続く実験 2 では、予期的推論生成と読解中に利用可能な認知資源量の関連を検証した。本実験では、読解課題と単語記憶課題という二重課題を協力者に与えることで、読解中に利用可能な認知資源量を操作した。推論内容を表す単語に対する語彙性判断時間の分析から、二重課題条件下で読解中に利用可能な認知資源が減少すると、予期的推論が生成されにくくなることが示唆された。また、読解後に行われた推論内容の妥当性判断の結果から、利用可能な認知資源の減少は特に推論生成の即自性・自動性を減じる可能性が示唆された。

実験 3 では、予期的推論生成と方略的なテキスト処理の関連を検証した。協力者は通常読解と、推論生成を目的とした教示・タスクが与えられた条件での読解を行った。推論内容を表す単語に対する語彙性判断時間を分析した結果、教示・タスクによる推論生成への促進効果が示されたものの、その効果は特に英語熟達度の高い学習者で大きいことが示唆された。また、読解後の筆記再生課題の結果から、教示やタスクによって読み手の注意が推論生成に割かれた場合でも、明示的なテキスト理解は減少していないことが示された。

研究 2 では、日本人英語学習者の読解において生成された予期的推論が後続文脈によって否定された場合、

推論情報が修正されるのか検証した。実験 4 では、研究 1 で明らかになった予期的推論が生成されやすいテキストと、生成された推論を否定する 1 文を追加したテキストを使用し、協力者の課題成績をテキスト条件間で比較した。推論内容を示す単語に対する再認時間の結果から、推論を否定する 1 文を読解した直後であっても、心内での推論情報の活性化は保たれていることが示された。また、読解後の筆記再生課題における推論情報の産出率の結果から、否定された推論情報は学習者のテキスト記憶から削除されていないことが示唆された。

続く実験 5 では、実験 4 の方法論的な限界点を踏まえ、有意味性判断課題と文再認課題を用いた検証を行った。推論内容を表す 1 文に対する有意味性判断の反応時間分析の結果、実験 4 と同様、推論を否定する 1 文の後でも心内での推論情報の活性化は保たれていることが示された。また、読解後に行われた文再認課題の結果からは、否定された推論情報はテキスト記憶から削除される傾向にあるものの、その記憶痕跡の完全な排除は困難であることが示された。

実験 6 では、一度生成された推論内容を修正する困難性が読解中のどのような理解プロセスと関連しているかを検証するため、眼球運動測定を用いた実験を行った。本実験では、実験 5 と同様の文再認課題を行うとともに、生成された推論を否定する文を読解する際の学習者の注視時間が分析された。読解後の文再認課題の結果は、実験 5 と同様に、否定された推論情報の記憶痕跡を完全に排除することが困難であることを示した。一方で、読解中の注視時間の分析結果からは、学習者は自身が生成した推論とそれを否定する文の不一致を読解中に即座に検知しているものの、特に熟達度の低い学習者においては、推論を否定する文を先行文脈の理解と統合することに困難があることが示された。

研究 1 は、日本人英語学習者の読解において予期的推論が生成されやすい・されにくい条件を、複数の要因の影響を含めて検証した。そして、日本人英語学習者の読解における予期的推論生成はやや限定的であり、テキスト・読み手・タスクに関わる要因の交互作用による複雑な読解プロセスであると結論づけた。一方、研究 2 では、英語学習者の読解においては生成された予期的推論の活性化を抑制することや、その記憶を削除することに困難が生じることが示された。特に、熟達度の低い学習者においては、生成された推論を否定する文脈をオンラインでそれまでのテキスト理解に統合することに大きな困難が生じることが明らかになった。これらの結果に基づき、予期的推論の生成と修正に焦点を当てた英文読解指導に対して示唆が与えられた。

審 査 の 要 旨

1 批評

本論文は日本人英語学習者の読解において予期的な推論の生成過程および修正過程について実証的な観点から検討した意欲作であり、次の点が高く評価される。(1) 結果もしくは動機に関わる予期的な推論でどのように推論生成が異なるか、文脈の制約の大小でいかに推論生成が異なるか、(2) 認知負荷の大小が、推論生成にいかに影響するか、(3) ありそうな結末 (likely outcomes) を予測させる方略を教示すると、単に読む場合に比べて、推論生成が促進されるか、(4) 一旦立てた推論を、抑制 (suppress) したり、削除 (delete) したりできるか (誤った推論消去をすぐに行うのは難しいのか) 等を明らかにし、(5) 眼球運動データをもとに、一旦立てた推論棄却のプロセスを探っている。

推論生成は、英文の「処理+保持+推論」という 3 重の同時進行処理が必要であり、この能力は、従来のような個々の単語処理や個々の文の意味理解の指導で終わっては身につかない。同時並行処理の能力を行う指導と、またそれをテストする方法を今後考えることが不可欠であることを明らかにするなど、貴重な研究成果であり、本論が我が国の英文読解指導に対して持つ示唆は極めて大きい。特に、推論生成を促す方略教示と学習者の英語熟達度が交互作用的に予期的な推論の生成に影響を与えているという結果は、推論生成を中心とした英語学習者の複雑な読解プロセスの解明と、それに基づく読解指導の発展に寄与する重要な知見となるだろう。

また、論文中でも述べられているように、必ずしも生成された推論がテキスト内容と合致しているわけではないことを考えると、推論生成と同等にそれを修正する過程や能力も英文読解に重要な役割を果たすといえる。本研究からはそのような推論修正の困難と、特に熟達度の低い学習者に特徴的な読解プロセスの困難を明らかにしており、これらの知見は英語学習者が柔軟な読解能力を身につけるために重要な示唆を与えるものである。

研究全体としては、推論生成に関わる要因が先行研究の精査に基づいて決定されていること、1つの検証課題について複数の手法を用いてアプローチされていることから、得られた結果もある程度妥当なものと評価できる。また、眼球運動測定に基づく検証によって、推論修正に伴う学習者のリアルタイムの理解プロセスを解明しようとするアプローチも興味深い。

一方で、推論生成の検証に対して複数の手法が用いられていることはその利点も理解できるが、更なる検討が必要な点でもある。通常は、実験2、3で使用されたように、推論生成の暗示的 (implicit) な影響を調べる目的では、語彙性判断を活用することがこれまで多かったが、実験1では語再認タスクを採用している。この手法を採用した理由を、客観的に説明する必要がある。また、推論生成の結果を、実験2・3では、暗示的 (implicit) に測定したいという目的は理解出来るが、このデータは実験1や他の実験とは異なるので、これら両方のデータを同じ土俵で比較するのは問題があると思われる。本論が目指す結論を導くための中心的なデータであることから、限界点 (Limitation) として記述してはいるものの (p209)、今後この妥当性を十分に検討しておく必要があると思われる。また、推論の生成に対する認知負荷の影響を検証した実験では、その影響が予想よりも明確に示されなかったと述べているが、この点については認知負荷を操作する方法を異なる観点から再度検討することが必要だろう。同時に、学習者の作動記憶容量の影響なども考慮する必要があるように思われる。

今後は、本研究で対象とした英語学習者よりも熟達度の高いもしくは低い学習者を対象として同様の実験を行い、本研究で得られた知見の一般化可能性や学習者要因の影響が詳細に解明されていくことが期待される。加えて、学習者が実際の読解場面で出会うようなレベルや長さと同等のテキストを用いることで、教室現場へのより具体的な指導方法への示唆も得られるだろう。さらに、推論の修正過程について、生成された予期的推論を否定する文脈の量を増やすことで、推論を修正するための学習者の漸次的な理解プロセスについても明らかにされていくことが望ましい。

こうした課題はあるものの、本論文は日本人英語学習者の推論生成や修正過程にについて、極めて詳細に心理言語学的な観点からの検討を実施した労作である。今後の英文読解プロセス、さらには英語リーディング指導に実質的な影響を及ぼすと考えられる研究成果であり、分野の知識の向上への高い貢献や読解研究への大きな寄与が期待され、高く評価できる。

2 最終試験

平成27年1月13日、人文社会科学研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士 (言語学) の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。